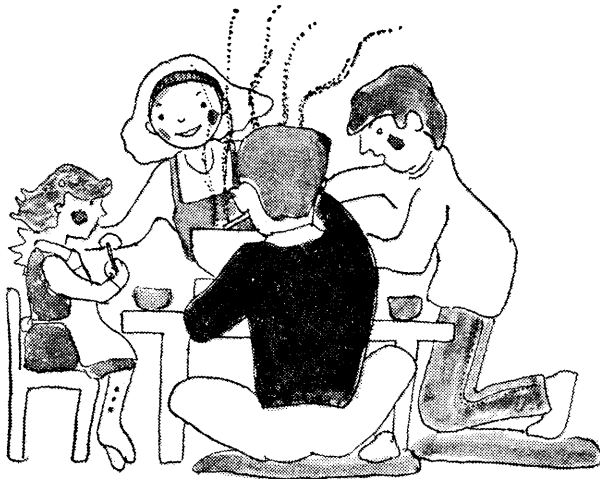


いろいろなことを教えてくれる子どもたち (12)

村石京子

。三才児の運動会

私どもの園では、日常は子どもたちの主体的な活動を中心とした保育を行なっていますので、三才児も四才児も、そして五才児も、入園してからずっと自由遊びを基本とした毎日を送っています。はじめは周囲が全く見えなくて自分中心な行動をとったり、母親から離れられなかったり、遊べなくてポツンとしていたり様々ですが、やがて自分で遊び出し、遊びながら友だちとのかかわり



を知り、友だちと遊ぶ面白さを身体で味わっていくうちに、幼稚園が好きになり、喜んで登園するようになってきます。子どもたちが自分の意志で行動し、自分の力で遊びを創り出していくことは、三才の入園当初から五才の卒業までずっと継続されていますが、それは時を追うとともに工夫され、複雑な奥行きのあるものに変化していきます。友だちとの関係も広がり、深まっています、それとともに自らも成長していきます。

幼稚園の生活の基本はこのようなところにあります。が、その中で生活に変化を持たせ、多様な経験を積むことによって幼児自らが豊かに大きく育ってほしいと願って、種々な行事をとりいれています。殊に二学期は多彩な行事が盛りこまれています。その中でもやはり運動会は大きなイベントであるといえましょう。そして子どもたちが自らやりたいという気持ちをもって参加出来るように進めていくのが、教師にとっても大きな課題となってきました。今年も夫々の組で夫々の保育者の工夫がおり込まれ、無理のないように、そしてあくまでも子どもた

ちを中心とした進め方がみられました。そしてまた夫々の組の中で、個々の子どもに合わせた種々な参加の仕方が見られましたが、その中から三才児のある子の運動会までの過程をとりあげてみましょう。

「もうじき運動会がありますよ。」と話しただけで何か嬉しく心弾む思いになってくる三才児の多くの中で、T夫はその表情にやはり一抹の不安を見せました。彼はかなり神経が細く、初めての経験には緊張と不安が高まることが多くみられます。入園時も暫く母から離れられないで泣いていましたし、園の全体の行事の誕生会などには、一緒に参加することに抵抗がありました。

T夫のそんな気持ちがわかるだけに、「運動会のと きみんなでするおゆうぎは一緒に出来るかしら」と私としてもとても気がかりです。先に述べたような毎日の生活を送っていますので、音楽リズムの面でも好きな子どもがレコードを聞きながら身体を動かしてみるといった体験はあるものの、全員で一緒に動くことは未経験です。T夫はといえば、そういった場面では椅子に腰かけて見て

いたり、あまり関係なく自分の好きな自動車の玩具を動かして遊んだりしていました。

今年は十月十二日が運動会です。三才児・四才児のうぎは「熊ちゃんの体操」と「あくしゅでこんにちは」をすることになりました。十月初めになると、各組では運動会の日には園庭をかざる万国旗づくりなどをやりはじめて雰囲気づくりが始まりました。「もうそろそろはじめましょうか」と職員室でも話題が出ています。日常の保育の中では自由遊びがあくまでも中心ですから、運動会の日には園庭でうぎをしたり、他の種目を行なったりするのにも、今年の子どもたちがどう参加していくかはちょっと予測しにくいところがあります。夫々の年令の担任は、引込思案の子どもや腕白連中の顔を思い浮かべると、はたして全員が喜んで参加するだろうかという心配が胸に去来します。三才の組では「熊ちゃんの体操」のレコードをかけると、新しい経験にはりきって反応してくる子どもや、本当の熊の子みたいに友だちとじゃれあってぶざげている子どもなどいろいろでした。T夫は

というと、やはり椅子に腰かけたままでじっとしていません。でも今日はそうとしておきましょう。ただ帰りしなに傍に行つて「Tちゃんも今度やる時ががんばってね。」と言うと「ウン」とうなづいていました。いつ皆の仲間に加わつてやるようになるか楽しみです。

二回目の機会には、T夫はまだ皆と一緒に動くことはしませんでした。前のときよりも熱心に友だちの動きに注目していました。そして三回目の日には、椅子に腰かけたままですが、動物の表現を両手をそつと小鳥の羽のように動かしてみたり、小さな耳をつくつて兎の様子をしたりしています。立ちあがって動くところまではいなくても、もうT夫は充分友だちと一緒に動きのリズムを楽しんでいる様子でした。次の日、今日は一列に並んで歩くレコードをかけてみると、あ、T夫もすんなりと歩き出しました。そして続けて主題のレコードにつなげていくと、身体を動かし心が弾んだらしく、ブレーキがはずれたかの如く大声でキャッキャッと言い、友だちにからまりながらリズムをとっています。そのT夫の様

子を見て、はじめは集団行動をとりにくい子どもが他の子どもと一緒に動けるようになるまでの、一段ずつ階段を登っていく過程を順序立てて見た思いでした。そして運動会当日には、T夫はたどたどしいながら、ニコニコリズムに合わせておどっていました。かけっこも一番後からでしたが、一生懸命走りました。その様子を見て、T夫と同じように心配性なT夫の母も明るく嬉しそうな表情でした。もっとも予行の日には、初めてかぶる運動会用の紅白帽をいやがって泣いたりしたのですが……。

この運動会という場面を通してみられたある三才児の音楽リズムへの参加の仕方は、新しい体験に抵抗をもつ子どもが、自分のペースで次第に学習していき、やがて皆の間へ入るまでの着実な歩みをみることの出来た一例でした。

幼稚園の中には、他にも似たような場面がたくさんあることと思います。そして一せいに指導することに教師の気持が集中すると、そのことに乗らない子どもがいると、あせったり、無理押しをしがちです。でも形だけ皆

と一緒にすることを願うよりも、日はかかって子どもの心がそのことに向かうときまで、その子の歩みを見守ることの方が大事だと思います。子どもにはその心があるし、その力もあります。そして自分自身で一つの課題をクリアしたときは、子どもは自信を持ち、とても生き生きしています。外山滋比古前園長が「教育には薫陶が大切」とよく話されましたが、子どもの中に熟成してくるとのを待つことは、何事につけても大切なことだと思います。

そして運動会当日、どの級も心配していた担任の気持ちを吹きとばし、子どもたちは皆のびのびと運動会に参加していました。日常の生活の中で心ゆくまで自分の遊びを楽しんでいれば、皆でやる活動にも気持を合わせて参加する心を自然と持ってくれるのだと思います。かけっこも、つなひきも、玉入れも、そしてゆうぎもリレーもみんな充分力を出して一生懸命やっていました。見せることを中心とした運動会ではなくて、子ども達自身が楽しく参加出来ることをねらいとする運動会であるなら

ば、練習回数は少なくても充分気持の盛り上がりが見られます。幼稚園は、これで充分なのだと思えます。おしまいに見る側からの感想も一言つけ加えましょう。

ある母親から夕方家に電話がかかってきました。「今日は、本当に楽しい運動会、有難うございました。家中で楽しめました」と。生来が単細胞型人間である私にとっては、このような言葉はどんな栄養剤よりも速効性があった、今日一日の疲れがすっと消える感じでした。

○子どもの中に見られる優しさ

毎日子どもたちと一緒に生活していると、友だちを思いやる優しさをいろいろな場面で見ることがあります。

最近の小さな体験の中から三つほど書いてみたいと思います。

はじめは三才児でのおべんとうの時間のときのことです。子どもたちはおぼんの上に、バスケットからおべんとうを出して仕度をします。おべんとうにコップ、お箸

箱、そしてデザートと手順よく並べるのは、三才児にとって仲々大へんなようです。それでもさっさと出来る子もあれば、大人がちょっと手をかして上げないと引っくりかえしてしまいそうな子どももいたり、様々です。やっとあちらのテーブルもこちらのテーブルもおべんとうの仕度が出来て、待望の「いただきます」の挨拶が来ました。一人一人のおべんとうの中には、ビタミンI（アイ）がたっぷり入っていてとてもおいしそうです。

そんな中でA男が「あつフォークがない、フォークがないよ。」と言いました。「バスケットの中にあるかもしれないから探してみてね。」と私。「やっぱりなかった。」と困った表情です。「幼稚園に用意してあるフォークをかってあげましょう。」と言おうと思ったとき、それより先にごく自然な態度で、「ハイ」といって自分のフォークを差し出したのは、向かい側の席に坐っていたM子です。ミッキーマウスがついていて、スプーンとセットになっているフォークでした。A男はちよつとはにかんだ表情ながらニコツとして受けとると、さっさと食べはじ

めました。その二人のタイミングのよさには、大人の入りこむ余地はない感じでした。いつもは殆ど行動をともにしている様子の見られないM子とA男の間にも「友だち」という意識がすでに芽生えていて、友だちが困っているときには自分のものもすぐに貸して上げる心づかい、そしてそれを素直に受けとる気持、可愛いやりとりの中に温かさが感じられてくるのでした。

次は五才児のある行動です。運動会の予行の日のことでした。ちょっと小太りなS君は少し行動がゆっくりしています。自分の組の出番が終って他の組の種目を見る時、部屋の出入口の石段の席は先に来た者で一ぱいのように、S君は坐るところが見つからずに立ちすくんでいました。私は何か声をかけようかと傍へ行ったときに、S夫の椅子に気づいたT男は坐っている大勢の友だちを少しずつつめて動かして一人分の空間をつくり、S夫を坐らせると何事もなかったように自分の場所で声援を続けていました。運動会の練習のときなどになると、子どもたちはかなり興奮して自分のことだけに夢中にな

ってしまいます。幼児ですから、それでも仕方ない場面ですが、日頃の友だち関係の中で育っている優しさが自然とT男の行動となって現われたのだと思います。

そして三番目はやはり五才児の組のことです。それは運動会の前日のことでした。私どもの園では、運動会当日の子どもたちの観覧席は、各部屋のポーチや砂場などが座席となって椅子で埋まります。そのために昨日までは、みなで協力して高く大きく築き上げた砂場の山はくずしてよくならし、平にしておかなくてはなりません。力を合わせてつくった山ですから、わけを話して、今度は平にするのに力をかしてもらっていると、あいにくの雨が降り出しました。早く止んでと願う心に、無情にも雨足が強くなってきました。「ぬれるからもういいわ。雨にぬれてかぜをひくといけないから、お部屋に入ってタオルでよくふいてね。」とA先生。手つだっていた数人の子どもたちがいそいで部屋に入ったのを見届けて、ぬれた外靴などを始末している先生に「ハイ」といってきれいに四つにたたんだ自分のタオルを差し出したのはM

君です。「あら、どうも有難う。」と嬉しそうなA先生。「雨にぬれておかげひくといけないものね。」さっき先生が子どもたちに言った言葉がそっくりM男の口から出て来ています。雨でぬれてしまったA先生の髪を見て、大事な先生が雨にぬれてかぜをひいたら大へんと心配になって、自分のタオルを持ってきて差し出したのでしょう。横から見えていた私にもA先生の嬉しさがよみとれ、そしてM男の優しさが伝わってくるとても暖かい交流でした。

子どもたちの小さな思いやり、大切に見守っていききたいですね。そしてこの心をもっと大きく育てたいと願います。それには日頃、子どもたちと接する教師や母親達が暖かく、優しく、子どもの心を受けとめていくのが一番基本なのではないでしょうか。優しさや思いやりは身近かな大人から子どもへと伝えられ、そして子ども同士の間で、あるいは子どもから大人へと渡されたり広がったりしていきます。やがてそして多くの人と人との間に

も、広く大きく育っていくものなのだと思います。
(お茶の水女子大学附属幼稚園)

